ぬへし。人の物にはあらじ。身を終ふるまで。心かくへし。忘るべからず。

閑居の樂（今樣）

禾の舍あるじ

ふりもせず、くもりもはてぬ春の日の花をやしなふうすがすゑ、棚ひく云たの窓あかく、文机きよくうちはらひ、云らぬむかしの水莖の、あとかきうつし塵の世の、心を洗ふ友として、長閑にくらすたのしゑに、易ふべきものは天地の間になにかあるべきと、れもへはいつしろもろこしの、獨樂園のあるじとぞ、やがてわが身もなりにける。

丙申の春彌生の盡日

學生森寺綏來の身まかりける時その靈前に默誦しける

禾の舍あるじ

敎へてし心つくしのなみた川みなわとなりぬ君いかにせむ

花下言志

さく花の盛みせばや數ならぬこの身も後の名こそ惜しけれ

雲雀

霞たつ空にはのめくやまよりもはのかに見えて雲雀なくなり

窪田常吉